



話のたまご

NEWS LETTER

話のたまご 検索

INDEX ① ガスは「あかり」から始まった ② かまどからシステムキッチンへ ③ 入浴やシャワーでリラックス ④ 環境を大切にしながらさらに進化

ガスがひらく「むかし・いま・あした」 ガスの歴史と文化から 暮らしのさまざまな変化が はっきり見えてくる!

大切なエネルギーとして暮らしに欠かせない「ガス」。現在に至るまでにはさまざまな移り変わりや物語があり、使われ方やガス器具も、時代とともに変遷を遂げてきました。この国のガスが、暮らしをどんなふうに豊かなものに変えてきたのか、その歴史を訪ねてみましょう。

明治5年に横浜にガス灯がともり 日本初のガス事業がスタート

日本におけるガスの歴史の始まりは「あかり」からでした。1872年(明治5年)に横浜で日本初のガス事業が、フランス人のアンリ・プレグラン指導のもとで、高島嘉右衛門によってスタート。この年に横浜の馬車道通りに、街灯としてのガス灯がともりました。明治の錦絵に数多く登場するガス灯は、先端技術による新しい時代のシンボルであり、上野、新橋、銀座、日本橋、九段、浅草など数多くの東京の名所に欠かせない、街づくりの主要アイテムとなりました。

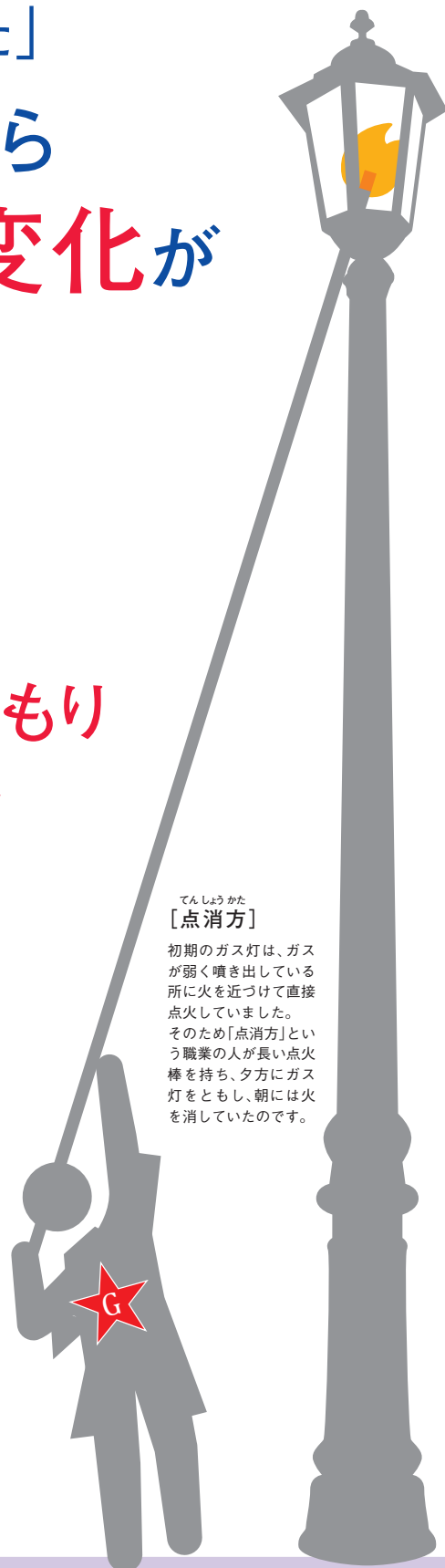
暗闇に光をもたらしたガスのあかりは、街を照らしただけではありません。商店の照明や博覧会のイルミネーションなど、明治の初めの都市の暮らしにさまざまなかたちで溶け込んでいきました。ガス灯は少しずつ人々の夜の活動を広げ、暮らしの文化を彩ったのです。



銀座のお店を照らすガス灯の絵(明治15年)

てんしょうかた
[点消方]

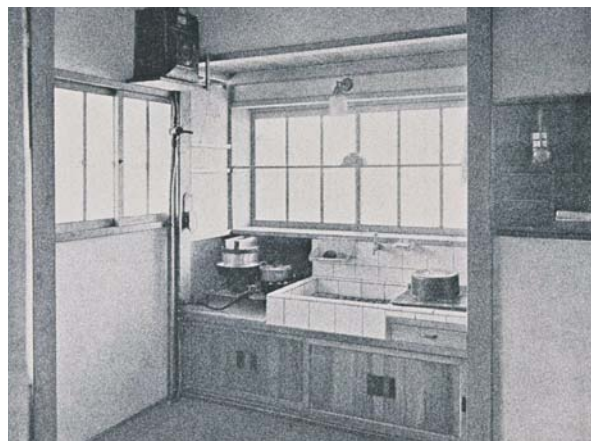
初期のガス灯は、ガスが弱く噴き出している所に火を近づけて直接点火していました。そのため「点消方」という職業の人が長い点火棒を持ち、夕方にガス灯をともし、朝には火を消していたのです。





明治の終わりから大正・昭和にかけて さまざまなガス器具が登場!

やがてガスは「あかり」だけではなく、「熱」として使われるものになります。明治の終わり頃から大正、そして昭和にかけて、ガスは「衣・食・住」のすべてに関わり、楽しい工夫が施されたさまざまな器具によって暮らしを豊かなものにしていきます。「衣」を豊かにするガスアイロン。「食」の世界を広げる食パン焼き器や七輪。「住」を快適にするガスストーブは、当初はイギリス製のものが輸入されていましたが、面白がりの日本人はカニの形をしたストーブをデザイン。ガスの炎で赤くなる部分をカニの甲羅に見立てた、楽しい気分になるものでした。ガスという一つのエネルギーから、数多くのアイデアが花開き、新しい暮らしの可能性がひらかれていきます。



昭和11年当時の台所



【食パン焼き器】



【ガスかまど】



【蟹型ストーブ】



【ガスアイロン】

変遷を見てみよう その1 [台所] おいしいごはんを訪ねてみれば 文明開化の味がする

明治30年代になると、ガスの炎は煮炊きなどの熱源になりました。1902年(明治35年)には東京ガスが国内最初のガス器具特許品である「炊飯用ガスかまど」を発明。さらに大正の中頃になると、ガス会社はより一歩進んで台所調理システム全体を販売するようになります。これが現代のシステムキッチンのはしりとも言える「調理台」と呼ばれるものです。

やがて戦後間もない1951年(昭和26年)にはダイニングキッチンが登場。台所のスペースが家庭の中で重要な役割を担うようになります。欧米全域に普及していたシステムキッチンが日本に登場したのは昭和40年代後半。当時の日本は高度経済成長期の後半でしたから、生活のゆとりと技術の進歩が一体となり、劇的な暮らしの変化が実現したのです。



昭和34年当時の台所



変遷を見てみよう その2 [お風呂] 日本人が大好きな家庭での入浴が定着

台所と並んで大きく変化したのがお風呂です。戦後の都市部では銭湯に通うのが一般的でしたし、毎日入浴するなど夢のような話でした。

それを大きく変えたのは、1965年(昭和40年)の「バランス型風呂釜」の販売。この屋外と直接給排気を行う風呂釜が開発されると、全国の公団住宅に採用され、一般家庭にも次第に普及していきました。さらにシャワーも使えるようになり、日本人が大好きな入浴の習慣が、ますます定着するようになりました。



昭和12年当時のお風呂

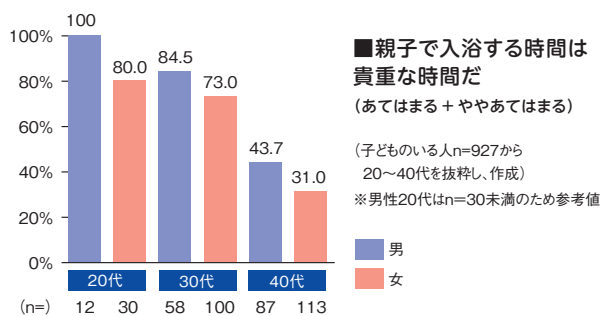


昭和45年当時のお風呂

リラックスや健康志向など 生活意識の変化とともに文化を創出

家庭に定着した入浴のスタイルは、1976年(昭和51年)の屋外設置型(RF)風呂釜の登場によって、さらに変化していきます。これまで浴室内に設置していた風呂釜が屋外に設置できるようになったことで、浴槽のスペースがゆったりと広がりました。するとお風呂は「体を洗うだけの場」から「家族のコミュニケーションの場」としても変化していきます。

東京ガス都市生活研究所の調査によると、現代では「親子で入浴する時間は貴重な時間だ」と考えている親は多く、お風呂は家族のコミュニケーションの場として考えられているようです。また近年、若い世代では浴室で歌をうたったり、スマートフォンを使ったりするなど、入浴を「自分のための時間」として活用している人も増えているようです。浴室の変化が入浴に対する意識の変化へとつながり、一つの生活文化を創出したと言えるのではないのでしょうか。



東京ガス都市生活研究所「現代人の入浴事情2015(2015年11月発行)」より



コラム その1

都市ガスの原料はクリーンな天然ガスへ

昔は石炭から作っていた都市ガス。やがて、より効率的な原料として石油が使われるようになります。そうした中で1973年(昭和48年)のオイルショックや公害問題などもあり、東京ガスは原料を環境に優しい天然ガスへと移行。この移行作業は完了までに16年間かかった一大プロジェクトで、会社一丸となって、お客さま一軒一軒のガス器具の調整を行いました。



お客さまの器具調整をしている光景

コラム その2

ガス管など安心・安全のインフラを整備

地中に埋設されているガス管の素材も、以前に使われていた鉄から、土中の水分によって腐食せず、伸びても破断しにくいポリエチレン管へと変わりました。より暮らしの安心・安全を確保するために、目に見えないところでも、大きな変化が推進されています。



ポリエチレン管



環境への優しさという視点を大切にする時代へ

近年はエネルギーを大切にしながら、環境への優しさについてもしっかり考える時代になりました。1976年(昭和51年)には、東京ガス温水システム(TES)の販売がスタート。ガスで作ったお湯を給湯、床暖房、浴室暖房など住まい全体に効率よく使うシステムは、当時たいへん画期的なものでした。

その後、2009年(平成21年)に世界で初めて家庭用燃料電池「エネファーム」の販売を開始。都市ガスから取り出した水素と空気中の酸素から電気とお湯を作り出し、環境に優しいエコな機器として普及しはじめました。2017年(平成29年)5月には「エネファーム」の累計販売台数8万台(東京ガス管内)を達成。暮らしそのものがエコにつながる時代へと変化してきました。



パナソニック製 家庭用燃料電池「エネファーム」



販売初期のTESカタログ(1983年)

さらに使いやすく、より豊かにイノベーションは未来へ続く

そして、ガスは生活や社会のニーズに応えながら、さらなる進化を続けています。東京ガスでは、対象の「エネファーム」をご利用のお客さまが家の外からお風呂や床暖房を操作できるスマートフォンアプリをはじめ、新たな生活スタイルの提案として入浴中に「本を聴く」ことができるオーディオブックサービス「Furomimi(フロミミ)」など、暮らしをより豊かにするサービスの提供をはじめています。

暮らし方の新しい提案とともに生活価値を高めてきた、ガスによるイノベーションの歴史、いかがでしたでしょうか。これからもガスがひらく楽しい暮らしに、どうぞご期待ください。

スマートフォンアプリ「あなたとエネパ」



電気・ガス・お湯を、黄・青・赤の3色のキューブで表現。使った分のキューブが日々積み上がる。

外出先からお風呂や床暖房のON/OFFが操作できる。

ガスミュージアムは今年で開館50周年を迎えました



ガスミュージアム(左:ガス灯館 右:くらし館)

東京ガスのガスミュージアム(ガス資料館)は2017年(平成29年)4月29日に、開館50周年を迎えました。140年以上にも及ぶガスと暮らしとの関わりを、明治からのガス器具など貴重な資料とともにご紹介しています。入館は無料ですので、どうぞお気軽にお越しください。

詳しくは <http://www.gasmuseum.jp>

ガスミュージアム 検索



〒187-0001 東京都小平市大沼町4-31-25(西武新宿線「花小金井」駅よりバス約10分 JR中央線「武蔵小金井」駅よりバス約22分 他)
※ご来館の際は事前にホームページなどで開館時間・休館日をご確認ください。